

岸
辺
の
花

【登場人物】

セーラ・リリエンタール	ハウスメイド
メアリー・ストックブリッジ	屋敷の女主人
アリッサ・スチュアート	ハウスメイド
マーサ・キャンベル	メイド長
レジーナ・ウイルソン	コック
カール・ハインツ・アルベルト	機関車製造会社社長

【時代】

1930年代前半

【場所】

イギリス オックスフォードシャー
ストックブリッジ卿の屋敷

【第一場】 使用人部屋

薄暗く殺風景な使用人部屋。

簡素なテーブルとイスが置かれており、そこにセーラとマーサが向かい合わせで座っている。

マーサは厳しい視線で、セーラが持ってきた紹介状に目を通してている。

緊張の面持ちのセーラ。

マーサ リ……リ……？

セーラ リリエントールです。

マーサ セーラ・リリエントール、ね……前のお屋敷には何年？

セーラ 2年です。その前のところでは1年ほど。

マーサ ……長くて2年？

セーラ 短い、でしょうか……？

マーサ 引越しが趣味なのかと思っただわ。ちなみに、私はここに来て10年になります。

セーラ ……。

マーサ お屋敷を辞めた理由は？

セーラ 旦那様の事業が立ち行かなくなって……。

マーサ 破産したと？

セーラ はい……。

マーサ 二軒とも？

セーラ はい……。

マーサ (ため息をつき) ミス・リリエントール、ここがストックブリッジ卿のお屋敷であることは知ってるわね？

セーラ はい。

マーサ そして卿は既にお亡くなりになって、今は奥様のお屋敷だということも。

セーラ あ、いえ……。

マーサ そういう時は「ええ、もちろん」と言うのよ。

セーラ ……ええ、もちろん。

マーサ 旦那様がお亡くなりになっても、由緒あるイ

セーラ ええ、もちろん。

マーサ 前のお屋敷からの紹介状を見る限り、あなたの仕事ぶりに特に不安はありません。

セーラ (ホツとする)

マーサ 成金の家で働く分にはね。

セーラ ……え？

マーサ 確かに今、このお屋敷は人手不足です。でも、

ここに貴族のお屋敷なの。当然使用人もそれに相応しい者でない。

セーラ な、何がいけなかったのでしょうか…？

マーサ まずはおつと経験が必要ね。5年後、またいらっしやい。

セーラ で、でしたら、このお屋敷で経験を積ませて下さい！ お願いします！

マーサ ここは学校ではないのよ。失敗があったら、反省文だけじゃ済まない時もあるわ。

セーラ あ、あの、私、一生懸命働きます！ 何でもやります！ だから、お願いします！

マーサ (ため息をつき) ミス・リリエントール…。

突然、誰かが部屋に入ってくる。
入ってきたのは、メアリーである。

メアリー リリエントール…：呼びにくい名前なこと。

思わず立ち上がるマーサと、ただただ驚くセーラ。

マーサ 奥様！

セーラ お、奥様…：!!

マーサ まだ使用人部屋に入っでこられて…：!!

メアリー マーサ、これから出かけるわ、車を呼んで。

それからコートを出してちょうだい、毛皮のコート。今すぐね。

マーサ ここは主が入っでこられるような場所ではあ

メアリー　りません。少しは自重して下さいませ。
じゃあ毛皮なしで出かけろと言うの？　私が
凍え死ぬ前をお願いね。

部屋を出ようとするメアリーだが、セーラを見るや、顎を持ってグイッと顔を寄せる。

驚きのあまり、されるがままのセーラ。

メアリー　あなた、ファーストネームは？

セーラ　セーラ……です……。

メアリー　だいぶ呼びやすくなったわね。セーラ、あなた何でも一生懸命やるって言ったわね？

セーラ　は、はい……。

メアリー　（ニヤリと笑い）使いがいがある顔をしているわ。

マーサ　奥様、その子は……！

メアリー　毛皮を持ってきてくれるのなら誰でもいいわ。これからよろしくね、セーラ。

セーラ　こ、こちらこそ……。

メアリー　（セーラの顔を放し）早速毛皮をお願いね。場所はマーサに聞いて。あと車も忘れずにね。頼んだわよ。

部屋を出ていくメアリー。

マーサ　（メアリーの背中に向けて）奥様、毛皮は私
がご用意しますから！

ため息をつくマーサ。

圧倒されてしまい、呆然としているセーラ。

マーサ、突っ立っているセーラに振り返ると、渋い顔で手を差し出す。

マーサ　メイド長のマーサ・キャンベルよ。明日から

お願いするわ、セーラ。

状況を飲み込み、笑顔で握手を交わすセーラ。

セーラ ありがとうございます、ミス・キャンベル！
お礼を言われることかはわからないけど。

セーラ え？

マーサ ……一番短いお屋敷勤めにならないことを祈
ってるわ。

セーラ ……え、ええ、もちろん。

マーサが部屋を出ていく。
残されたセーラの表情は、これから起こ
る出来事を予感しているかのような、不
安を感じさせるものである。

【第二場】客間

手狭だが、凝った造りの調度品で囲まれた客間。

その中で、ソファアでタバコを吸ってうつろいでいるレジーナ。

ドアが開き、花を生けた花瓶を持ったアリッサが入ってくる。

アリッサは、花瓶を部屋に飾る。

レジーナ あら、庭から摘んできたの？

アリッサ ええ。綺麗に咲いていたので。

レジーナ ふうん、いいわね。この屋敷ちよつと暗いからちよつどいいわ。

アリッサ ……タバコが見つかったら大変ですよ。

レジーナ 大丈夫よ、あとひと吸いだけ。

アリッサは花瓶を飾り終わると、調度品を端からハタキで叩いていく。

レジーナ そういえば、ちよつと聞いた、アリッサ？

アリッサ 何ですか？

レジーナ 2マイル先の屋敷のダーリントン卿ね、実はゲイなんだってさ！

アリッサ （あまり意に介さず）まさか。

レジーナ いや、私はなんか怪しいと思ってたのよねえ。だって浮いた話が全然なかったじゃない？

アリッサ 紳士だからですよ。

レジーナ 紳士だったって肩書きだけのヤツいっぱいいるわよ。デヴォンシャーのお屋敷のご主人は金儲けのことしか考えてないし、ベッドフォードシャーのところは毎晩のようにハウスパーティー開いて女引っかけて……貴族なんて、ロクでもないのばかりねえ。

アリッサ ……そろそろ厨房に戻った方がいいですよ、ミセス・ウイルソン？

レジーナ あ、そうね、またマーサにいびられちゃうわ。
（タバコを消して立ち上がり、ドアの方に向かいながら）あの人の嫌味はもう伝統芸ね。年期が違いうわ。よくまああんなに途切れずネチネチネチネチ……（振り返り）あ、マーサと言えばね。

アリッサ ……はい。

レジーナ 今日から新しいメイドが入るそうよ。

アリッサ そうなんですか？

レジーナ なんでも、マーサは反対してたのに、奥様の一言で決まっちゃったそうだよ。その時のマーサの顔、見てやりたかったわあ。

アリッサ へえ。

その時、メイド服を着たセーラが入ってくる。

レジーナ あら。

セーラ あ、は、初めまして。私、今日からこのお屋敷でお世話になります、セーラ・リリエントールといいます。

レジーナ ちょうどあなたの噂をしてたところなの。（手を差し出し）私はレジーナ・ウイルソンよ。コックをやってるわ。よろしくね、セーラ。（握手をし）こちらこそ、ミス・ウイルソン。

セーラ 私、ミセスなの。

レジーナ あ、し、失礼しました！

レジーナ （アリッサの方を向き）それからこっちが……。

アリッサ アリッサ・スチュアートよ。（握手をし）よろしく。

セーラ こちらこそ、ミス・シュチュ……ミシュ・シチュアー……。

レジーナが大笑いする。
顔を真っ赤にして頭を下げるセーラ。

セーラ す、すみません！

アリッサ 気にしないで。アリッサでいいわ。

セーラ は、はい、アリッサさん……。

アリッサ 私もあなたと同じハウスメイドよ。わからないことは聞いてね。

セーラ はい、ありがとうございます。

レジーナ これで屋敷の人間は全員だよ。

セーラ (少し驚いたように) 全員、ですか？ 人手不足とは聞いてましたけど……。

レジーナ 旦那様だったストックブリッジ卿が2年前に亡くなってから、だんだん減っていったのよねえ。今じゃ屋敷も手狭な物になっちゃったし。そうだったんですか。

レジーナ しかもね、噂では、ストックブリッジ卿は殺されたらしいのよ。

セーラ ええ!!

アリッサ (たしなめるように) ミセス・ウイルソン。あら、噂よ。あくまで噂。

セーラ 殺されたって、だ、誰にですか？

レジーナ もちろん、奥様よ。

セーラ ええ!!

レジーナ 旦那様は体調を崩して、しばらくして亡くなったそうだけど、奥様が毒を仕込んだんじゃないかって噂よ。最初からこの屋敷を乗っ取るつもりだったのよ。

セーラ ほ、本当なんですか……？

レジーナ いやいや、あくまで噂よ？ 私がここに入った時にはもう旦那様は亡くなってたからね。

セーラ (少しホッとして) そうですか……。

レジーナ でも、アリッサは何か知ってるはずよ。旦那様にお会いしたことあるもの。ねえ？

アリッサ ……ええ。

レジーナ でも、何も話してくれないのよ。絶対何か知ってると思うのに。

セーラ (緊張の面持ちでアリッサを見る)

アリッサ 私は何も……良い旦那様でしたってことしか……。

レジーナ これなのよねえ。でも、私はやっぱり奥様が殺したんだと思うわ。貴族なんてロクでもないいいざこざが仕事なもの。あとその貴族に尻尾振ってるヤツもね。

セーラ 尻尾、ですか……？

レジーナ マーサのことよ。

セーラ ミス・キャンベル？

レジーナ 何かにつけて貴族だの名門だの言っただけに媚び売ってさ。私たちには嫌味しか言わないんだから。アイツの言うことは信用しない方がいいよ。

セーラ はあ……。

その時、マーサが部屋に入ってくる。

マーサ 新人に講釈を垂れてる暇があるということは、夕食の買い出しはもう済んでるんでしょね、レジーナ？

レジーナ (慌てる様子もなく) あら大変、すぐに行くてくるわ、マーサ。夕食の時間には間に合わせるから、ご心配なく。

マーサ 是非そう願いたいわ。私も厨房にまであなたのお喋りを監視しに行く暇はないですからね。厨房は独立した場所なんだから、あなたに管理される謂れはないのよ。お気遣いなく。

レジーナが部屋を出る。

マーサ セーラ。

セーラ は、はい！

マーサ レジーナの言うことは本気にしないように。え……？

マーサ コックとしては優秀だけど、どうにもゴシツプ好きで、あることないこと言いふらすんだ

から……。

セーラ はあ……。

マーサ あげくに、奥様が旦那様を殺したなんて……あり得ないことだわ、嘆かわしい。あなたはそのようなこと信じないでちょうだいね。

セーラ は、はい。

マーサ それはそうと、奥様がお怒りよ。

セーラ え？

マーサ 部屋に飾る花を摘んでくるよう頼んだのに、いつまで待たせる気なの、と。

セーラ そ、そうだ、私、ハサミを探してて……！

マーサ （ため息をつき）そんな調子じゃ、あなたが庭に着く頃には花も枯れてしまうわね。

セーラ す、すみません！ ついお喋りをしてしまつて……！

マーサ 言い訳は結構。そもそも、奥様のご用事の最中に長々とお喋りなんて、許されるはずがないでしょう？

セーラ は、はい！ 本当に（すみません）……。

アリッサがセーラ of 言葉を遮り、二人の間に入る。

アリッサ すみません、ミス・キャンベル。私がセーラを引き留めてしまったんです。

セーラ え……？

アリッサ そんなに急いでいるとは知らず、つい話し込んでしまいました。申し訳ありません。

マーサ ……アリッサ、あなたがそんなにお喋りだとは知らなかったわ。でも仮にそうだとしても、セーラは奥様のご用事を何一つこなせていないじゃない。

アリッサ いいえ、彼女はもうお花を摘んできています。

アリッサが、先ほど部屋に飾った花瓶を手取る。

アリッサ あまりに綺麗なので、私が無理やりここに飾るよう言ったんです。奥様のお言いつけとは知らなかったもので。セーラのせいではありません。

セーラ あ、あの……。
アリッサ いいのよ。本当なんだから。

何も言えなくなってしまうセーラ。
マーサがアリッサとセーラを交互に見るが、やがてやれやれという感じにため息をつく。

マーサ (セーラに) だったら、早くその花を持って行きなさい。奥様がお待ちかねよ。

セーラ は、はい！
マーサ アリッサ、お喋りはほどほどにね。
アリッサ すみませんでした。

マーサが部屋を出ていく。
セーラがアリッサに何度も頭を下げる。

セーラ すみません、何から何まで……！
アリッサ いいのよ。

セーラ でも、全部アリッサさんのせいになってしま
って……！

アリッサ 話し込んだのは本当なんだから、気にしないで。屋敷のことは少しずつ覚えてくれればいいから。ちなみに、剪定バサミは向こうの引き出しよ。

セーラ は、はい！ ありがとうございます！
アリッサ (花瓶を渡し) さ、早く持ってってあげて。
セーラ はい！

花瓶を受け取り、いそいそと部屋を出ようとするセーラ。

アリツサ それと……。

セーラ え？

アリツサ あの二人の言うことは、話半分に聞いてればいいわ。お互いの陰口ばかりで、こつちからすればお互い様なもの。

セーラ (苦笑し) そ、そうですね。

アリツサ ……私にしてみれば、貴族に媚びようと嫌ってようと、関係ないわ。

セーラ え？

アリツサ 使用人は、主人に言われたことをこなすしかないのよ……たとえば、どんな主人であつても……。

アリツサの表情には、怒りと悲しみが入り混じったような、暗いものがある。

セーラ アリツサ、さん……？

アリツサ ……ごめんなさい、また引き留めちゃって。

(花瓶を示し) それ、お願いね。

セーラ あ、はい……。

アリツサが、部屋を出ていく。

セーラはアリツサの言葉の真意を考えるが、花瓶を見て我に返り、いそいそと部屋を出ていく。